

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00733

研究課題名（和文）英語多様性に対応するグローバル型シャドーイングの開発

研究課題名（英文）The development of global shadowing for English varieties

研究代表者

濱田 陽（Hamada, Yo）

秋田大学・高等教育グローバルセンター・准教授

研究者番号：00588832

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最大の目的は、これまでネイティブスピーカーの英語をモデルとして行ってきたシャドーイングという枠組みを、国際共通語としての英語に対応したシャドーイングにモデルチェンジする事であった。そのために、まず、英語母語話者の英語を聞くことができるシャドーイング法を開発した。また、これまでリスニング力向上が大きくつたわれてきたシャドーイングの効果、アウトプット型へ対応させるため、発音向上を目標としたシャドーイング法の開発も試みた。さらに、日本人英語学習者が英語を聞く際に苦手な点についても検証し、これまでのシャドーイング研究の枠組みを広げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでのシャドーイング研究では、シャドーイングは、英語母語話者の英語を聞くための練習法としての位置づけであったが、本研究では、母語話者を含めた、国際共通語としての英語というモデルの中にシャドーイングを位置づけ、その方法を検証した。それによって、シャドーイングは、異なる英語を話す人たちの英語を聞くための優れた練習方法であることが分かり、さらに、世界の（英語母語話者以外の）人たちにとっても分かりやすい英語を習得するための練習方法の一つとして認識できることとなった。

研究成果の概要（英文）：The ultimate purpose of this project was to change the framework of shadowing from the native speaker model to EFL model. To this end, first, I attempted to develop a new shadowing procedure to adapt to non-native English accents. Then, I attempted to develop out-put shadowing by improving students' pronunciation. Lastly, by examining the weakness of Japanese English learners for listening, I attempted to expand the framework of the shadowing research.

研究分野：応用言語学

キーワード：shadowing perceptual adaptation pronunciation listening comprehensibility

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

シャドーイングは1990年代に日本に英語学習法として紹介され、その後徐々に広まり、過去10年ではその知名度と教室での導入が広がった。英語母語話者の話す英語を遅れずに復唱するという独特の練習法であるシャドーイングは、リスニングの処理のボトムアップ処理を鍛える練習方法として注目され、実際に、日本人英語学習者のリスニング力の向上が研究により報告されていた。また、シャドーイングの発音向上への注目も徐々に高まってきていた。

また、英語自体に関して、World Englishes から始まり English as an International Language、そして、English as a Lingua Franca と、学術的にも学習者の視点も変わってきていた。

本研究では、このような現状を踏まえ、シャドーイング研究におけるモデルチェンジを企てた。英語は国際共通語として認識されていた一方、シャドーイングの研究においては、モデルとなっていたのは英語母語話者であったため、シャドーイング研究のモデルが英語の現状に追いついていなかったという背景がある。

### 2. 研究の目的

これらの背景をもとに、本研究の目的は、これまで英語母語話者(NS)の英語を聞き取るためのリスニング指導法であったシャドーイングを、非英語母語話者(NNS)を含む国際共通語としての英語(ELF)対応型にモデルチェンジすることであった。いいかえると、多様な種類の英語を聞き取るリスニング力・分かりやすい発音を備えたスピーキング力を育む新たなシャドーイング法を開発する事であった。

### 3. 研究の方法

コロナ禍により当初の計画の変更を迫られ、本研究は5年間行った。多様な種類の英語を聞き取るリスニング力の育成と、誰にとってもわかりやすい発音の育成を目指し、以下の方法で研究を行った。まず、非英語母語話者の英語をシャドーイングすることによって、perceptual adaptation の力を身につけさせる方法開発を教室実実験を通して行った。また、研究を進める中で、シャドーイングといっても類似した相当数の種類が既に紹介されていることから、それらを体系的に理論的枠組みの中で整理する必要があることを認識し、レビュー論文という形でその研究にも取り掛かった。さらに、モバイルテクノロジーを利用して、従来のシャドーイング研究よりもアウトプットに重きを置いたシャドーイング研究を行った。具体的には、アウトプットを重視しながらリスニング力のボトムアップスキルを高める方法の検証を行った。加えて、多様な英語を聞くためのシャドーイング法のさらなる方法開発も行った。

### 4. 研究成果 (論文・発表解説)

研究成果として、様々な英語を聞くことができるようになるためのシャドーイング法開発  
分かりやすい発音を習得するためのアウトプット型シャドーイング法開発  
様々なシャドーイングについて第二言語習得の理論的枠組みの中で位置づけを明確にすることの3つができた。結果については、以下の通りである。

様々な英語を聞くことができるようになるためのシャドーイング法開発

【Hamada and Suzuki (2021a)】

訛りのある英語に対するリスニング力を高めるために、perceptual adaptation の概念を背景として、学習者がその訛りに適応するために、シャドーイング時にスクリプトの使用をすることの効果を検証した。

【実験協力者】

3群からなる96名の日本人大学生を対象に、シャドーイングのみ行う群 シャドーイングとスクリプト確認を行う群 統制群とした。

【題材】

5つの異なる英文をそれぞれ、モンゴル・中国・ケニア・マレーシア・フィリピン出身の英語話者に読んでもらったものを使用した。事前・事後テストのdictationには、25個ずつの単語を、それぞれ、アメリカ・イタリア・中国出身の英語話者に読んでもらったものを使用した。

【手続き】

シャドーイング群は、同じ英文に対して3回連続してシャドーイングを行った。シャドーイング・スクリプト群は、同じ英文に対して、2回シャドーイングを行い、スクリプトで確認した後、3回目のシャドーイングを行った。これらの手順で5つの異なる英文を5日間かけてシャドーイングした。これらの前に事前テスト、後に事後テストを実施した。統制群は事前事後のみ受けた。

【結果】

アメリカ英語と中国英語に対して、顕著な変化が見られた。スクリプトによる確認を行った群( )が、他の2つの群よりも向上していた。本結果は、スクリプト確認とシャドーイング練習によってより実践的なperceptual adaptation が促進されると考えられた。さらに、練習では使

用していないアメリカ英語についても、得点が向上していたころから、様々な訛りのある英語をシャドーイングすることで、なじみのあるアメリカ英語に対してのリスニング力も向上することが示唆された。

【Hamada and Suzuki (2021b)】

訛りのある英語を聞く練習をする際に、シャドーイングを行うべきか、リスニングをすべきかを検証した。

【実験協力者】

53名の日本人大学生が参加し、27名を実験群、26名は統制群として設定した。

【題材】

Harvard Sentence (Institute of Electrical and Electronics Engineers, 1969)から20文抽出し、中国語訛りの英語で音声を作成し、実験に使用した。

事前・事後テストは20語と6文を聞き書きとる dictation 形式のものを作成した。

【手続き】

20文を2文セットで扱った。初めに、10秒で最初の2文を黙読し、その後音声に合わせて文字を見ずにシャドーイングを行った。そして、この手順を繰り返した。この要領で計20文をシャドーイング練習した。練習前後に事前事後テストを実施した。統制群は、事前事後テストの間に5分の時間を設けた。

【結果】

実験群が統制群よりも有意に訛りのある英語の聞き取りが向上していることが分かった。実験自体は10分以内で終了しているため、10分もかからずとも、シャドーイングによって学習者の perceptual adaptation は向上することが示唆された。

#### 分かりやすい発音を習得するためのシャドーイング法開発

【Hamada (2020)】

これまでのシャドーイングの方法では、/r/や/f/などの日本人特有の苦手な音を聞き取ることができるレベルまでには効果が見られなかったが、アウトプット型シャドーイングを開発することで、それらの問題点を克服できるようになることを狙いとして、実験を行った。

【実験協力者】

12名の日本人大学生が参加した。

【題材】

Steve Jobs のスタンフォード大学での有名なスピーチの一部を使用した。参加者は、アルファベットと発音記号を並列したトランスクリプトを作成し、活用した。事前事後テストには、日本人英語学習者の苦手な音素を含む32項目ミニマルペアの単語選択問題を使用した。

【手続き】

週に一回の授業と授業外の学習を組み合わせで進めた。基本方針としては、授業では、日本人英語学習者の苦手な音素 (/l, ɪ /f, v/ /θ, d/ /a/ ʌ //ə/ /ɪ/ /sɪ// fɪ// tɪ//w/) を数回に分けて説明・練習を行い、授業外では、各自、Steve Jobs のスピーチをシャドーイング練習した。第12回の授業で発表を行うために、直前の3回は、授業中にペアを作ってお互いのシャドーイングの出来栄を確認し、フィードバックをもらった。プロジェクト開始前と開始後に、事前事後テストを行った。

【結果】

日本人学習者の苦手な音素について、聞き取りの向上が見られた。例えば/r/を含んだミニマルペアとしては、collect/correct や right/light などの項目がある。/ /は、face/faith や worse/worth がある。/b/と/v/については、very/bury, ban/van などがある。これらの結果から、ただシャドーイングを通常の手順で行っても一定の効果は見られるが、アウトプット型の発音を重視した練習方法を取り入れると、日本人学習者の苦手な音素についての聞き取りも向上することが分かった。

【Hamada (2021)】

これまでのシャドーイング研究をもとに、リスニング及び発音向上のためのシャドーイング練習方法を提唱した。

表1では、門田・玉井(2004)の提唱した手順をベースに作成した Hamada (2017)をもとに、リスニング力育成のための手順を提唱している。大まかな流れとしては、初めはマンブリングとう小声のシャドーイングで始め、次にテキストと一緒にシャドーイングをしてみる。スクリプト確認を挟んでから本格的にシャドーイング練習を行い、スクリプト確認の時間を設ける。さらに、モバイルテクノロジーを活用し、自分のシャドーイングを録音してみて、それを確認してみるという手順を推奨している。

発音向上のための練習方法としては、上記で報告したアウトプット型シャドーイングをもとに、個人練習と授業での確認を組み合わせ、最後に発表する形を推奨している。学習者は、自分がマスターしたい動画を各自で選ぶ。そして、初期段階で、アルファベットと発音記号を併記したスクリプトを作成し、初めのうちはアルファベットのスクリプトと一緒に発音に気を付けて

練習をする。授業では、ペアあるいはグループでの相互確認とフィードバックを与え合う。その後、発音記号を見ながらシャドーイングする段階に移り、それができた段階で、一度教師が電子で提出された音声ファイルを聞き、個別のフィードバックを与える。それをもとに、そこからは、何も見ないでシャドーイングを各自で練習する。授業ではペア・グループ確認を行い、発表直前に再度教師が音声ファイルを聞き、フィードバックをあたえ、最後の授業では、各自がシャドーイングを披露する。

これらの手順でシャドーイングを練習することにより、分かりやすい発音の習得が促進されると考えられる。

表1. シャドーイングのリスニング向上手順 (Hamada, 2021 をもとに作成)

ステップ	手順	ポイント
1	マンプリング	つぶやくように、小声でシャドーイング。音素に焦点を当てるといった目的を説明する。
2	スクリプトを見ながらシャドーイング	スクリプトを見ながらシャドーイング
3	2, 3分スクリプトチェック	うまくシャドー出来なかったところをスクリプトで確認
4	2回シャドーイング	音に気を付けて集中してシャドーイング
5	スクリプトチェック	自信がないところをチェック
6	自分のシャドーイングを録音	ICレコーダーで自分のシャドーイングを録音
7	個人で復習	録音とスクリプトを見ながら各自

表2. シャドーイングの発音向上手順 (Hamada, 2021 をもとに作成)

授業	手順	授業でのポイント
1	スクリプト作成	アルファベットと発音記号併記のスクリプトを作成して持ってくる
2	スクリプトを見てシャドーイング	ペアで出来栄をチェック
3	同じ	グループでチェック
4	発音記号を見てシャドーイング	ペアでチェック
5	同じ	グループでチェック
6	教師のフィードバック	教師がフィードバックを個別に行う
7	シャドーイング	ペアでチェック
8	同じ	グループでチェック
9	フィードバック	前回のフィードバックが生かされているか確認
10	発表	皆の前でシャドーイング発表

#### 様々なシャドーイングの整理

【Hamada and Suzuki (2022)】

シャドーイングについては、様々な種類と呼び方が存在する。しかし、一般の学習者にとっては数が多すぎて、分かりにくかった。同時に、シャドーイングの、特に発音に関する背景理論の構築が遅れていた。そのため、数あるシャドーイングを、第二言語習得理論の角度から整理して、体系的に示した。

16個の種類を抽出し、シャドーイングの効果の観点から、大きく音声処理とインテイク処理に分類した。そして、音声処理は音声知覚と発音に分けた。音声知覚の分野では、7つの種類を紹介している。(1)は通常のシャドーイングで、聞こえてきた音声をできるだけ忠実に復唱することを指す。(2)のマンプリングは、(1)と同じ行為ではあるが、小声でつぶやくように行う。(3)のテキスト提示シャドーイングでは、スクリプトを見ながらシャドーイングを行う。(4)の事前シャドーイングは、テキストの内容を理解する前にシャドーイングを行う事で、(5)の事後シャドーイングは、内容を理解した後にシャドーイングの事である。(6)自己モニタリングシャドーイングは、録音機器を用いて、自分のシャドーイングを録音してそれを復習するシャドーイングの事であり、本研究課題でテクノロジーを用いたシャドーイングと提唱していることもあり、奨励しているシャドーイングである。(7)ペアモニタリングシャドーイングは、(6)と異なり、ペアでお互いのシャドーイングをモニターしてフィードバックを行う。

発音においては、(8)プロソディシャドーイングは、聞くことに注意を向ける通常のシャドーイングと異なり、リズムやイントネーションといったプロソディに注意を向けて行うシャドーイングである。(9)のジェスチャーシャドーイングは、シャドーイングをしながら、強く読まれる箇所(強勢)にエアーパーチをするという、体を使って英語の強勢リズムを体得する方法である。(10)のIPAシャドーイングは、発音記号を見ながらシャドーイングをするという、音素に焦点を当てたものである。

次に、インテイク処理については、通常の、音声への注目を大原則とするシャドーイングと異

なるもので、活用する際は、その明確な区別が必要となる。(11)コンテンツ・シャドーイングは、音声に集中する通常のシャドーイングと異なり、内容も考えながら行うシャドーイングである。(12)Conversational shadowing は、通常は一人で行うシャドーイングと異なり、ペア同士で行うシャドーイングの総称である。(13)Selective shadowing は、(12)Conversational shadowing の一種で、相手の発言の中で、いくつか選択した語だけをシャドーイングするものである。または、個人で、音源を聞きながら、選択した語のみをシャドーイングすることもできる。(14)Interactive shadowing も、ペアで行うシャドーイングで、相手の発話をシャドーイングしながら、即座にコメントを付け加えたりするシャドーイングである。(15)Phrase shadowing は、通常は一語一句に着目してシャドーイングするが、フレーズごとにシャドーイングするものを指す。(16)Shadow-reading は、ペアでのシャドーイングに加え、要約やリテリング等も含んだ総合的な活動を指す。

表3 . シャドーイングの種類 (Hamada and Suzuki, 2022 をもとに作成)

分類	シャドーイングの呼び方	説明
<b>音声処理</b> 音声知覚	(1) Standard shadowing	聞いたものを同時に復唱
	(2) Mumbling	小声でシャドーイング
	(3) Text-presented shadowing	スクリプトを見ながらシャドーイング
	(4) Pre-shadowing	内容を理解する前にシャドーイング
	(5) Post-shadowing	内容理解後にシャドーイング
	(6) Self-monitoring shadowing	録音して復習するシャドーイング
	(7) Pair-monitoring shadowing	ペアのシャドーイングをモニターする
発音	(8) Prosody shadowing	プロソディに注目してシャドーイング
	(9) Gesture shadowing	ジェスチャーを使いながらシャドーイング
	(10) IPA shadowing	発音記号を使ったシャドーイング
<b>インテイク処理</b>	(11) Content shadowing	内容に意識を向けながらシャドーイング
	(12) Conversational shadowing	ペアでシャドーイング
	(13) Selective shadowing	部分的にシャドーイング
	(14) Interactive shadowing	相手の発話をシャドーイングして、コメントをつけたす
	(15) Phrase shadowing	フレーズごとにシャドーイング
	(16) Shadow reading	要約、リテリング等を含んだ総合的なシャドーイング活動

#### 【まとめ】

本課題研究での主要な研究結果を上に記載したが、従来のシャドーイングのモデルから、多様な英語の存在する現在の環境に対応したシャドーイングへのモデルチェンジは提唱できたように思える。コロナ禍により、当初の予定は変更することとなったが、シャドーイングにより perceptual adaptation が促進し、国際共通語としての英語という位置づけの中で、無理のない範囲でテクノロジーも取り入れ、発音を改善するためのシャドーイング方法も提唱できた。さらに、第二言語習得論の中で、体系的にシャドーイングを位置づけ、整理することもできた。

#### < 引用文献 >

- Hamada, Y. (2020). Hamada, Y. (2022). Developing a new shadowing procedure for Japanese EFL learners. *RELC Journal*, 53(3), 490-504.
- Hamada, Y. & Suzuki, S. (2021a). Listening to Global Englishes: Script-assisted shadowing. *International Journal of Applied Linguistics*. 31, 1, 31-47
- Hamada, Y. & Suzuki, S. (2021b). How do we help learners comprehend various Englishes? Shadowing for perceptual adaptation. *Journal of Asia TEFL*, 18(3), 1049-1056.
- Hamada, Y. (2021). Shadowing procedures in Teaching and their future. *The Language Teacher*, 45 (6), 32-36.
- Hamada, Y. & Suzuki, Y. (2022). Situating Shadowing in the Framework of Deliberate Practice: A Guide to Using 16 Techniques. *RELC Journal*. Online first.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yo Hamada and Yuichi Suzuki	4. 巻 Online
2. 論文標題 Situating Shadowing in the Framework of Deliberate Practice: A Guide to Using 16 Techniques	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 RELC Journal	6. 最初と最後の頁 Online
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/00336882221087508	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hamada Yo	4. 巻 53
2. 論文標題 Developing a New Shadowing Procedure for Japanese EFL Learners	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 RELC Journal	6. 最初と最後の頁 490～504
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/003368822093762	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hamada Yo and Suzuki Satoko	4. 巻 18 (3)
2. 論文標題 How do we help learners comprehend various Englishes? Shadowing for perceptual adaptation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Asia TEFL	6. 最初と最後の頁 1049-1056
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18823/asiatefl.2021.18.3.25.1049	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yo Hamada	4. 巻 45 (6)
2. 論文標題 Shadowing procedures in Teaching and their future	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Language Teacher	6. 最初と最後の頁 32-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTTLT45.6-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hamada Yo and Suzuki Satoko	4. 巻 31 (1)
2. 論文標題 Listening to Global Englishes: Script-assisted shadowing	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 31-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ijal.12318	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Yo Hamada
2. 発表標題 How to use shadowing in the globalized society
3. 学会等名 19th Asia TEFL international conference 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hamada, Yo
2. 発表標題 Shadowing research: The past and Future
3. 学会等名 46th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hamada, Y., & Kito, K.
2. 発表標題 Perception skills of Japanese university students
3. 学会等名 第45回全国英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hamada, Y., & Suzuki, S.
2. 発表標題 Shadowing as a practice for speech perception
3. 学会等名 The 9th International symposium on the acquisition of second language speech
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hamada, Y.
2. 発表標題 How to use Shadowing for pronunciation development
3. 学会等名 45th JALT conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yo Hamada
2. 発表標題 Shadowing its history and its future
3. 学会等名 2nd J-SLARF Colloquium
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yo Hamada
2. 発表標題 Aural decoding and comprehension in L2 listening
3. 学会等名 57th RELC International Conference
4. 発表年 2023年



〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------